

平成 23 (2011) 年度
第 2 回 知床世界自然遺産地域科学委員会
議事概要

場 所 : 北海道立道民活動センター かでる 2・7 820 研修室

日 時 : 平成 24 年 2 月 21 日 (火) 13:30~17:00

出席者名簿

知床世界自然遺産地域科学委員会 委員		
弘前大学白神自然環境研究所教授		石川 幸男
北海道大学名誉教授 (委員長)		大泰司 紀之
東京農工大学大学院共生科学技術研究院教授 (エゾシカ・陸上生態系WG 座長)		梶 光一
北海道大学大学院水産科学研究院教授 (海域WG 座長)		桜井 泰憲
北海道大学観光学高等研究センター教授 (適正利用・エコツーリズムWG 座長)		敷田 麻実
北海道立総合研究機構 水産研究本部長		鳥澤 雅
斜里町立知床博物学芸員		中川 元
北海道大学大学院農学研究院教授 (河川工作物AP 座長)		中村 太士
横浜国立大学大学院環境情報研究院教授 (ヒグマ保護管理方針検討会座長)		松田 裕之
(以上 50 音順)		
北海道立総合研究機構環境科学研究センター自然環境部研究主幹 (エゾシカ・陸上生態系WG 委員)		宇野 裕之
関係行政機関		
水産庁漁港漁場整備部計画課	計画官	藤橋 孝
北海道開発局開発監理部 開発環境課	課長補佐	萬 直樹
同	計画係長	田沼 浩一

斜里町総務環境部環境保全課	自然保護係長	岡田 秀明
羅臼町水産商工観光課	主事	遠嶋 伸宏
同	主事	遠山 和幸
知床世界自然遺産地域科学委員会 事務局		
環境省釧路自然環境事務所	所長	野口 明史
同	次長	中山 隆治
同	自然保護官	寺内 聡
同	自然保護官	木村 麻里子
ウトロ自然保護官事務所	上席自然保護官	野川 裕史
同	自然保護官	山岸 隆彦
羅臼自然保護官事務所	自然保護官	三宅 悠介
北海道森林管理局 保全調整課	課長	荻原 裕
同	自然遺産保全調整官	梶岡 雅人
同 知床森林センター	所長	金澤 博文
同 根釧東部森林管理署	署長	井上 康之
同 網走南部森林管理署	署長	木谷 三男
日本森林技術協会	上席技師	関根 亨
北海道環境生活部環境局自然環境課	課長	若林 健一
同	主幹	永田 英美
同	主査	小宮山 健太
同	主任	中村 由紀
同 水産林務部林務局治山課	主査（治山計画）	川口 豊
同 オホーツク総合振興局林務課	治山係長	遠山 重博
同 根室振興局林務課	治山係長	櫻庭 勝徳
同 建設部土木局砂防災害課	主任	齋藤 寛明
知床世界自然遺産地域科学委員会 運営事務局		
財団法人 知床財団	事務局長	山中 正実
同	事務局次長	増田 泰
同	事務局次長	田澤 道広
同	研究員	葛西 真輔
同	研究員	能勢 峰

1. 発言者につき敬称は省略しての記載とした。行政関係者の所属は、一部略称を使用した。

2. 文中、WG はワーキンググループの、ML はメーリングリストの、AP はアドバイザー会議の、それぞれ略称として使用した。

*本会議は、大泰司委員長が都合により急遽退席され、桜井委員が座長代理を務めた。

開 会

開会挨拶

野口：本日はお忙しいなか、会議にご参加頂き感謝申し上げます。また、日頃より知床の保全管理に助言を頂き感謝する。

本日はまず、ユネスコ/IUCNからの勧告への対応状況について報告する。ユネスコ世界遺産センターへの報告は1月13日に提出済みであるが、みなさまにご協力頂き感謝している。次に、来年度からの長期モニタリング計画についてご議論いただき、結論を出したいと考えているので宜しくお願いしたい。また、これまでご苦勞をかけた第2期知床半島エゾシカ保護管理計画、ヒグマ保護管理方針についても来年度から施行したいので、こちらもご協議願いたい。長時間の会議となり申し訳ないが、忌憚のないご意見を願いたい。

議 事

議事 1. 各ワーキンググループ等の検討状況等について

■資料 1-1：各ワーキンググループ等の検討経過について

…木村（環境省）より説明、以下抜粋。

✓今年度はエゾシカ・陸上生態系WGは6月と10月に2回開催、海域WGは7月と2月に2回開催、河川工作物APは4月と6月、1月に3回開催、適正利用・エコツーリズムWGは6月に1回開催、2回目を3月に開催予定、ヒグマ保護管理方針検討会議は8月に1回開催、2回目を明日（2月22日）に開催予定。

■資料 1-2：エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ経過報告・今後の予定

…梶座長より説明、以下抜粋。

✓第2期知床半島エゾシカ保護管理計画（案）について、パブリックコメントを実施したが、意見は0件だった。今後、パブリックコメントのやり方を考え直す必要がある。あわせて、羅臼とウトロで住民説明会を開催したが、修正を要する意見は無かった。

✓植生指標及び中長期目標について検討を進めた。

✓平成 24 年 3 月に第 2 期知床半島エゾシカ保護管理計画を策定予定。

■別添 3：平成 23 年度知床半島 3 地区のエゾシカ捕獲手法について

…寺内（環境省）より説明、以下抜粋。

✓幌別-岩尾別地区において、小型囲いワナ、くくりワナ、麻酔銃捕獲、流し猟式シャープシューティング（以下 SS とする）にて捕獲手法の試験を行っている。

✓ルサ-相泊地区において、大型囲いワナ、小型囲いワナ、流し猟式 SS、巻狩りにて捕獲手法の試験を行っている。

✓知床岬地区は天候・流氷等で捕獲が予定通りできていない。流氷期にヘリを使って捕獲を実施することも検討中。

✓環境省事業で計 213 頭、加えて北海道森林管理局による隣接地域の春苧古丹の囲いワナで計 84 頭が捕獲されている。

【質疑】

中川：完成に近づいている第 2 期エゾシカ保護管理計画について、別添 2 の 14 ページに「管理目標を設定し検証を行い」とあるが、知床岬についてはやや具体的な表現もあるが、管理目標が抽象的である。軋轢緩和を図ると書いて、この目標で検証ができるのか。管理目標に具体性が必要だと感じた。知床岬では、調査モニタリングをやっており具体的な管理目標が設定できると思う。環境省が説明した資料に「知床岬は平方キロあたり 5 頭を目指した」と書いてある。このように管理目標として出ているのであれば、管理計画に載せるべきではないか。他地区についても、具体的な数値は出せなくとも個体数を半減といったように、具体的な目標設定が必要だと感じる。

梶：管理計画は前回は踏襲している。管理計画の中では、中川委員の言うとおりの管理目標は抽象的である。知床岬では植生指標ができたので、植生指標を応用しながら管理目標を開発していく段階である。具体的な管理目標は管理計画ではなく、実行計画に入れようという議論をシカWGの中で行ってきた。

中川：実行計画ということは、単年度の目標を作るということか。

梶：たとえば知床岬では、3 年間で半減できるという実行計画を作ったが、管理計画には書いていない。

中川：たとえば、知床岬は 5 年間で何頭にするのか。明確な目標があればわかりやすく、

評価できると思う。

梶：知床岬について具体的な目標があるのは過去のデータがあるからである。知床岬で作った指標を他地域に当てはめていこうという段階だ。向こう数年間でシカの数を半減できるという見込みがあって密度操作に着手するが、知床岬以外の地域については、ライトセンサスなどの指標はあるものの、具体的に何頭のシカが生息しているのかわかっていない。つまり、知床岬はある程度具体的な目標が立てられるが、他地域は具体的な目標を立てにくい。

寺内：資料 1-2、(4) 中長期目標が中川委員の指摘の内容にあたる。管理計画の設定範囲が広く、対策ができる地域が限られており、全域でどのような反応が出るのか見づらと思う。密度操作実験事業を行う場所について、5年の単位でアクションプランを作っていくことを考えている。ご指摘の内容はそこで議論されるのではないか。

松田：中川委員の意見に同感である。いままでどこまでわかっている、何を、どこに近づいていくかをより明確に常々考えるべき。1か所で捕獲を行って、とり尽くした感じで捕れなくなる、だから全体の目標が達成できるのか、できないのか見えないといけないと思う。明後日、屋久島でも科学委員会とシカWGがあり、おおかた似たような議論になっている。地域によって平方キロあたり 20 頭がいい、5 頭がいいと目標を設定し、生息数がどのくらいで、このくらい捕獲したが足りないところ、充足しているところ、メリハリが見えてくる。結局どちらにしても、最終的な目標はシカ密度ではなく、植生の回復である。植生指標は重要である。屋久島とも議論は共通なので、環境省でも双方の情報を見ながらやっていくと見えてくるものがあると思う。

梶：松田委員の話を補足したい。今は捕獲方法の検討をやっているが、シカの密度を下げるシナリオができていない。今検討しているやり方は、低密度を維持していくときに使えるやり方だと思うが、現在は非常に高密度なので、大規模な対策を実施して高密度状態を中密度に持っていき、さらにその後低密度にどのように持って行って維持するか、現実的なプログラム、アクションプランが必要。今はその段階に行くべき時点にある。

桜井：管理計画とアクションプランとの整合性、管理目標にどう書き込めるかということについて議論していくということでしょうか。

一同：異議なし。

中川：もう 1 点ある。別添 3 の表に猛禽類繁殖期という矢印があるが、繁殖行動は 1 月から始まる。すくなくとも 2 月には、猛禽類の繁殖に対する人の影響度が高くなる。これまで、猛禽類に配慮しながらシカの捕獲を行ってきた経緯がある。この矢印をせめて 2 月初旬から入れてもらいたい。

寺内：了解した。個別に専門家に相談して、調整させてもらいたい。

■資料 1-3、海域WG資料 2：海域ワーキンググループの経過報告・今後の予定

…桜井（海域 WG 座長）より説明、以下抜粋。

- ✓現在、管理計画の見直しを行っている。2012 年 5～6 月までに、次期計画の見直し案を作成し、平成 25 年度から新たな管理計画とモニタリング手法によって進めていきたい
- ✓横断評価に、「海洋生態系の保全と人間活動」という社会経済的な項目を追加するかどうかを検討。
- ✓次期計画で強化する視点としては 3 つ、「流氷と海洋生態系の動向から地球温暖化を含む気候変化の兆候を監視」「海洋・陸上生態系の相互作用について、栄養循環、ネットワーク機能から一層の注視」「生態系サービスの地域社会にもたらす便益を把握するため社会経済的視点を強化」。

■資料 1-4：河川工作物アドバイザー会議経過報告・今後の予定

…中村（河川工作物 AP 座長）より説明、以下抜粋。

- ✓今年度は会議を 3 回実施。改良をすべきとされた 13 基のうち、12 基が改良済み、残る 1 基については改良工事中で来年度終了予定。
- ✓来年度は改良が完了した 13 基について、総括的なとりまとめと評価を行う。評価は行政側が行うのではなく、河川工作物 AP の委員が中心となって行う。
- ✓さらなるダム改良には、土地利用の現状が変化しない限りは困難。ルシャ川など社会状況が変化しつつある場所もあり、長期的なシナリオに関する議論が必要。
- ✓長期的なモニタリング計画について、当初は対象がルサ川、ルシャ川、ホロベツ川だったが変更。ルシャ川、テッパンベツ川、ルサ川とする。遡上数の調査方法についても、産卵床数からの推定ではなく、定期的に現地に行つて遡上数をカウントする方法に変更。

■資料 1-5：適正利用・エコツーリズムワーキンググループの検討結果と決定内容

…敷田（適正利用・エコツーリズム WG 座長）より説明、以下抜粋。

- ✓知床エコツーリズム戦略を 2011 年 6 月から検討。平成 23 年度は知床エコツーリズム戦

略の文章案を作成してきた。

- ✓知床エコツーリズム戦略の特徴は3つ、「地域主導を重視した目的」「新たな検討の枠組み」「判断基準の設定」。
- ✓平成24年3月の第2回検討会議において、エコツーリズム戦略（案）に合意する予定。平成24年度はエコツーリズム戦略を試行的に運用し、地域内での運用結果の検討や、地域外も含めた広報と公聴を踏まえて修正、最終案を来年度中に決定する。

■資料 1-6：ヒグマ保護管理方針検討会議の経過報告と今後の予定

…松田（ヒグマ保護管理方針検討会議座長）より説明、以下抜粋。

- ✓平成23年度の第1回会議は、ヒグマ保護管理方針案の策定スケジュール、住民説明会、住民の意識調査アンケート、中長期的な管理のあり方を主な議題として開催。
- ✓ヒグマ保護管理方針案の住民説明会を実施したが、参加者が少なかった。
- ✓住民の意識調査アンケートは斜里町及び羅臼町の対象者のそれぞれ4割弱から回答を得た。住民のヒグマの目撃経験率は高い。今後ヒグマをどうするかについて、ヒグマは増えたという人が半数以上を占め、行政が率先して管理すべきという意見が多数を占めた。駆除については、市街地のクマは駆除するという意見が多いが、国立公園の中ではそうは思わないという意見が多かった。
- ✓中長期のシナリオについては、シナリオを3つ提示、それぞれどのような課題を伴うのか検討した上で住民に意思決定してもらう予定。5年後の見直しを視野に、今から議論を始めたい。

■資料 1-7：「知床半島ヒグマ保護管理方針」（案）変更点

…木村（環境省）より説明、以下抜粋。

- ✓科学委員会の方が先行開催になってしまったが、保護管理方針案に関する最終審議は明日2月22日のヒグマ保護管理方針検討会議で行う。
- ✓知床半島ヒグマ保護管理方針の策定者に「北海道森林管理局」を追加した。また、住民説明会における意見を受け、背景等に文言を追加した。

【質疑】

桜井：事務局から補足説明をお願いしたい。

永田：海域WGについて、特に追加説明はない。海域WGに関して、新たな規制は行わないという当初の考え方に基づいて計画の改定作業を進めたい。

荻原：河川 AP について、中村座長の報告のとおりで追加説明はない。陸海物質循環に関する扱いは、河川 AP か海域 WG かはこれからの整理だが、そうした議論に参加していきたい。

桜井：陸から海への物質輸送のモニタリングについては、海域 WG の帰山委員から提案があった。今後のモニタリングをどうするか、海域 WG でまず整理を行う。必要があれば河川 AP に提案したい。海域WGと河川 AP で相互に責任を持つ必要がある。

中村：陸から海の何に注目するのか。

桜井：洪水の際の土砂やフルボ酸鉄などの栄養供給の話が出た。

松田：第 2 期海域管理計画について、新たな規制を行わないのは当然だが、評価してどのように管理するのかが何も書かれていない。たとえば、漁業の主要漁獲魚種が変わるかもしれないというモニタリング結果が出てきた際、いろいろなコンサルティングができる。何か書き込むことはできないのか。

桜井：その点は議論した。書き込めそうなものがありそうだ。たとえばスケソウダラ。現状を長期で見れば減少、5 年間で見れば横ばいだ。次の 5 年間でどうかというと、ロシア海域の状況を見ていると増えそうだ。漁獲高があがるという予想で検討する。その他の魚種で入れ代わりが発生する、イカの来遊が増加したといったこともあるので、次の見直しについて書き込みをできるようにしたい。

宇野：海域管理計画について、社会経済的な視点の強化は重要と考える。モニタリングや個別評価に関連する部分については、おもにサケ・スケトウダラ、利用の適正化がモニタリング指標になり、漁業とレクリエーションの関係を評価していくという理解で良いか。もう 1 点、指標生物の中にアザラシ類があるが、どういった現状か。アザラシ類は、北海道全体で今後問題になってくると考えられる。トドについては現状がわかってきていると思うが。説明願いたい。

桜井：現状では個別評価の対象項目として「海洋レクリエーション」があったが、これを「社会経済」という評価項目に変えて、今後の 5 年については新たに書き込む。牧野委員と敷田委員にお願いして作ってもらっている。

アザラシについては、ゼニガタアザラシが非常に増えているという問題がある。それから、ゴマフアザラシもロシア側の管理がうまくいってなくて増えている現状が

ある。これは広域的な現象であり、知床だけで議論できない可能性がある。流氷の状況も関係してくる。総合的に検討する必要がある。トドもそうだが、個別に切り出して評価することはできないと考えている。

松田：河川APの報告において、外部評価は河川AP委員が行うという説明があった。もともと13基のダムの改良について、河川AP委員が審査し意見を言ってきた。河川AP委員の審査を経て、その評価をもとに事業を進めたのであれば、評価は河川AP委員以外がやらないと真の外部ではない気がする。

中村：確かに外部評価という言葉は正しくない。ただし、我々が提案した最良の改良が全て行われたわけでない。たとえば、サシルイ川では魚道の改良が行われたが、河川APでは異なる方法を提案していた。また、不必要と指摘した玉石の連結工事が行われた河川もあった。河川APは工事が行われた後にならないと現場を確認できなかったということもあり、ひとつひとつの工事の細かなところまでチェックできていないという現状がある。そのような意味で、万事が委員の指摘通りにいったわけではない。そのような状況に対して、私も怒ったことがある。

これらの経過を踏まえて、まずは河川APが現状を評価すべきだろうということになった。当初は評価を行政にやってもらったが、行政がやったことを自ら否定的に評価することは無理だ。河川AP委員であれば是々非々でものを言える。お手盛りの評価となってしまうようであれば外部評価が必要だが、新たに外部から専門家を集めるのも大変なため、当面は現在の委員で評価を行うことでいいと考えている。

桜井：最終的な評価は科学委員会で行うので、その手法でよいと考える。

敷田：海域の社会経済的な評価の実施に関連して、適正利用・エコツーリズムWGでエコツーリズム戦略を検討してきたが、その中でも社会経済に係わる部分が多い。海域でも陸域でも産業的な利用と非産業的なレジャー、レクリエーション活用はどこにでも起こることである。できれば生態系毎ではなく、総合的に社会経済的な評価をするための話し合いの場を科学委員会直轄で持っていただくほうが合理的な検討ができると考える。陸域と海域を同時に利用するツアーも現実には存在する。

もうひとつメリットがある。新たな規制やルールを設定した際、どの程度の影響が社会や経済に出るのか議論することができる。これまでは生態系への影響の評価を最優先してきたが、新たな規制やルールによって人間側も影響を受ける。提案させて頂きたい。

桜井：海域WGでも議論したが、社会経済的活動となってくると海だけでは収まらない。

知床世界自然遺産地域管理計画への書き込みを、次の見直しの時に充実させる必要がある。事務局から意見をもらいたい。世界自然遺産として自然だけを保護するのではなく、人間も含めて社会経済的な観点からの評価も重要なので、扱いをどうするか検討頂きたい。

中山：難しさを感じる。社会経済ということだと、現状のカテゴリーからはみ出す。北海道から新たな規制、云々という話もあったが、漁業活動など人間活動に対するプレッシャーを与えるのではないかとということが議論されると思う。話を聞くことはできるが、細かく議論していかないと事務局として判断できないと考えている。

松田：だからこそユネスコの MAB 計画と連動した管理計画にするとよい。ユネスコに提出する世界遺産のチェックリストをみてもわかると思うが、世界自然遺産で、社会経済に関する人間活動を行ったことでプラスに評価されることはほとんどない。人間は自然に影響を与えないほうがいい、影響を与えない範囲で活動するという原則になっている。自然の恵みがあるから生態系サービスが豊かになっているということの評価するためには、MAB 計画と連動するのが望ましいと思う。MAB 計画であれば、その点を受け止めて評価することが可能である。

桜井：この点については、議論を継続するということがよいか。世界自然遺産地域管理計画の改訂が 3 年後にあるので、3 年後を見据えて時間をとって議論していくことにしたい。

敷田：中山次長が言われたようにいろいろな懸念はある。世界遺産の価値を最終的にどう評価していくか考えた場合に、経済的な評価、文化も含めた社会的な評価は重要な要素である。知床世界遺産のブランドを形成していく際、重要なデータが得られる可能性があると考え。知床における観光消費額は 124 億円もあり、農業や漁業を超えている。そうした現実を考えると、大勢の観光客が来てお金を落としているからそれだけでいいという評価では甘い。先行的にその価値を評価する必要がある。それから、たとえば規制したときにどの程度のマイナスが出るか予測するといったことは経済学分野の専門家も必要だが、先行して準備を進め、次の管理計画改訂で必要があれば採用する。それから、様々なルールや制度を作る際に、社会経済的な面も含めて妥当性を検討するため、たとえば牧野委員と私で小さなグループを作り検討を進め、次回以降の科学委員会の場に材料を提供するということもできるがどうか。

中山：いったい何を評価するのだろうかという懸念から地元の方々はひかれると思う。海域 WG では、海鳥の保護について、地元の人たちとプラスの方向になることを一緒にや

っている。そこを理解してもらえればいいと思う。最初から何かを考えていくということだと具体的なものが見えてこない。この提案については、事務局内部で議論が必要だが、小規模なグループでまず検討を始めていくのは妥当と考える。

桜井：事務局と敷田委員、そこに牧野委員を加えてメールで検討を進めるということでしょうか。

中山：そのように引き取りたい。最後に確認がある。知床半島エゾシカ保護管理計画とヒグマ保護管理方針は今回の議論で成案と言うことで、来年度より施行することにしたのでよろしくお願ひしたい。

(異論無し)

議事 2. 世界遺産委員会からの勧告への対応について

■資料 2-1、2-2：勧告への対応状況に関する本報告について

…木村（環境省）より説明、以下抜粋。

✓勧告への対応状況について、平成 24 年 1 月 13 日に本報告を提出、1 月 27 日に UNESCO 世界遺産センターに受領された。

【質疑】

桜井：これはすでに提出済みということでしょうか。

木村：提出済みである。

議事 3. 長期モニタリング計画の策定について

■資料 3-1、3-2：知床世界自然遺産地域長期モニタリング計画の素案から案への変更点

…木村（環境省）より説明、以下抜粋。

✓長期モニタリング計画（案）について、科学委員会や各WG等における議論を踏まえ、素案から案へと変更。変更点は、モニタリングの基本方針の評価項目について重要性を踏まえた順番に並べ替えた点、No.10「エゾシカの採食圧の把握に関する広域植生調査」

について項目の名称及び内容、No.16「広域植生図の作成」について合致する評価項目及び内容、No.17「河川内におけるサケ類の遡上数、産卵場所および産卵床数モニタリング」について内容を変更した点。

【質疑】

石川：植生モニタリングに関連して意見を申し上げる。詳細にシカと気候変動のモニタリング項目について説明をしてもらったが、事実上もうひとつ大事なことがある。これまで植生調査してきたところは人間の利用と関わる場所も入っている。資料3-2の別表3、評価項目には右側に「7. レクリエーション利用等の人為的な利用」が入っているので、モニタリング項目の名前としては、「エゾシカそれから人の利用および気候変動をモニタリングする」ということである。植生調査は人の利用も含めて設定されている。できればモニタリング項目として「人の利用」をしっかりと明記すべきと思う。他の部分でも、この項目にかかわるところは文言を変えて頂きたい。

資料3-1の【手法について】、「No.16：広域植生図の作成」、モニタリング手法として空中写真と航空写真は重複しているのでこの文言は整理すべき。

それから、「高層湿原、森林限界及びハイマツ帯」とあるが、ポイントはハイマツ帯が広がっている中に小規模な湿原植生や雪田植生があるが、そのハイマツ帯が分布域を急速に拡大することで小規模な湿原植生や雪田植生が圧伏されて減っていくことが危惧される点だ。そうした意味で、ハイマツ帯の変動をモニタリングすることで、同時に湿原が減っていくこともモニタリングできるので、この部分の文言は整理すべきだ。文言は私も考えるので、後日やり取りさせてもらいたい。

桜井：補足だが、「No.16：広域植生図の作成」、モニタリング手法は、航空写真とは別に衛星画像を使うのではないか。整理をお願いしたい。

中山：衛星画像も使っていると思う。文言を整理したい。

それから、ご指摘のあった人の利用についてだが、この点は前回と変更していない。資料3-1、最終ページ、【評価指標及び評価基準について】、変更後を見ると、評価指標でも「登山道沿いの踏圧状況」、評価基準でも「登山道沿いの踏圧：踏圧が拡大しないこと」としている。この点は変更がないので、了解いただきたい。

桜井：海域でも議論があったが、モニタリングに関して一番の大きな問題は予算がない状態でどのように長期モニタリングを行うのかという点だ。長期モニタリングの見通しを説明して頂きたい。

中山：予算の見通しはない。まとめて予算をとれることはおそらくないだろう。モニタリングについては現在、その時々で可能な予算を確保して、できるところからやっている。長期モニタリング項目は、既存のWGや計画から抽出しているので、それらを活用しながらモニタリングしていくのが基本だが、実施主体が決まっていない項目もあり、事務局内でも分担について協議したい。

長期モニタリング計画についても、今回で成案にしたいと考えているが、海域WGでも積み残しや宿題を頂いている。明日、ヒグマ保護管理方針検討会議もあるので、これらの宿題や議論を踏まえて手直しをしながら進めていきたいと思う。

休憩

議事 4. 知床世界自然遺産地域年次報告書について

■資料 4-1、4-2：知床世界自然遺産地域年次報告書の構成変更について

…敷田（適正利用・エコツーリズム WG 座長）より説明、以下抜粋。

- ✓年次報告書は、一般の方が読んで理解できるもの、知床の管理体制の内容について広く知ってもらえる媒体とする。細かい数字や種名などを入れた資料は付録として編集する。
- ✓「Ⅲ. 知床世界自然遺産地域の生態系と生物多様性の現況と評価」については、現状と課題を項目別に記載する。執筆は各WGの委員にお願いする。各委員に記述して頂きたい要素は、生態系についての「事実」や「推定」、現在の「状況」や「状態」、「変動」、生態系への攪乱などの「危機」である。
- ✓「Ⅳ. 知床世界自然遺産地域の利用状況と評価」については、適正利用・エコツーリズムWG、海域WGの委員が担当する。
- ✓「Ⅴ. 知床世界自然遺産地域管理計画の執行状況」については、事務局も含めた関係機関が担当する。
- ✓「Ⅵ. 管理実施の総合的評価」については、大泰司委員長と相談し執筆分担する。
- ✓平成 24 年 7 月の第 1 回科学委員会で案を示せるよう、4 月以降に原稿執筆依頼を行う予定。

【質疑】

鳥澤：年次報告書は年次の結果を淡々と書くのみとし、過去との比較は記述しないということか。

敷田：10年前とは比較しないが、2-3年前と比較してもらうのはかまわない。

鳥澤：たとえば、資料4-2、ヒグマについての記述、「推定〇個体のヒグマが生息している」であれば現況で間違いないが、評価するとなると、その個体数がどういう意味を持つか書かなければならない。比較しないと評価できないのではないか。海洋生態系についての記述で、「261種」とあるが、現況として事実だが、この数字が多いのか少ないのか、低い水準か高い水準かがわからない。これでは評価に繋がらないのではないか。

敷田：事実は事実としてコメントして頂きたい。ただ、理由が何か特定できない場合についてはコメントは必要ない。得られた知見の範囲内で書いていただいでよいと思う。近年のデータがない場合は、一番近い調査の結果を書いてもらってよい。

桜井：たとえば、2010、2011年に羅臼沿岸でスルメイカが大量にあがったが、遡ると1960年代や70年代にも同じようなことがあった。水産生物の場合は、長期トレンドのなかでその年を評価することがある。鳥澤委員が言われたようなことも書き込まないと年次報告にならないと思うがよいか。

敷田：過去との比較が可能なものは書いて頂いてよい。

鳥澤：現況だけでいいのであれば最新データを書けばいいと思う。評価まで必要ということであれば、過去との比較、長期で見てどうかを書かないと評価までは書けないと思った。以前に発言したが、5年毎のデータを振り返るならならいいが、たとえば水産生物の場合は毎年毎年かなり変動があるので、去年と比べて減ったが、危機的なのかというと、また翌年は増えたりするので、短期間の中で毎年毎年評価しても、全体的な流れでどうなのかは長期的なトレンドを見ないと評価できない部分もある。

敷田：ご指摘の点だが、5年ごと10年ごとということだが、年次報告書は、昨年何が起きたのかを優先して書いていただきたい。長期変動については、年次報告書ではなく、長期モニタリングでみてもらうのが科学委員会全体のフレームワークとしてよいと思うがどうか。

松田：ヒグマの場合は何頭いるかがわからない。わかっている知見で何が起きて、どういう意味か、執筆者の筆でわかりやすく、面白く、魅力的に書くのが大事であると柔軟に解釈してよいか。それから、共著者は柔軟に設けてよいか。

中村：文量は問わないのか。年次報告書を書く際、事務局がデータ提供を含めて手伝ってくれるという前提でよいか。

敷田：順番に答えたい。松田委員のご指摘はその通りである。一般の方が対象なので、去年起こった重要なこと、今後起きそうな重要な変化、注目してもらいたいことを優先して書いてもらいたい。もちろん科学的な記載を意識するが、完全に断定できないことは断定できないと書いてもらうことが一般の方の共感を得ると考える。また、ページについての制約だが、全体で 20-30 ページに収めたいと思っているので、逆算するとひとつの項目は複数ページではなく、せいぜい半ページから 1 ページ程度になると思う。最終的にどのようなものができあがってくるかは、最初の試みなので確約できないが、こうしたものは一旦作ってみて順応的に修正していくのが一番いい。初年度はみなさんの思いで書いてもらい、それをもとにすれば、次年度以降の書き方を共通化するなど、工夫ができると考えている。

事務局の手伝いについて、年次報告書の作成はもちろん事務局が手伝えることが前提となっている。事務局に手伝ってもらわないとできないのでお願いしたい。

これはお願いだ。これまでの年次報告書には、詳細な統計データが入っていた。そこに、あれも入っていない、これも入っていないという注文が科学委員会でも多かったが、知床のデータベースにもデータはあがっている。詳細なデータを年次報告書に入れるよりも、みなさんに記載してもらった内容に対応するデータをコンパクトに入れたいと思う。自由にどんどん入れられると言ったが、ある程度の限界があると思ってもらいたい。

繰り返しになるが年次報告書は、世界遺産管理の体系について、一般の方に広く共感を得るための資料である。科学的な判断はもちろん必要だが、現状はこうで、こういう管理を進めて、こうした成果につながっているという「成果」がわかりやすく説明されることが大事だと思っているので、みなさんとこの点を合意共有してもらえれば、決しておかしなものにはならないと思っている。ご理解をお願いしたい。

鳥澤：統計データは、年次報告書の後ろに参考資料で入れるということだったが、本体は文章だけのイメージか。図表は使えるのか。

敷田：図表の中に種名が入っていたり、図表が英語で書かれていたりすると理解が難しいので、相談させてもらいたい。図表がわかりやすいものであれば、遠慮なく入れて頂きたい。

桜井：名称は、「年次報告書」よりも「年次白書」のほうがいい気がする。

敷田：年次報告書は、年次白書に近いイメージで完成していくと思う。

中山：年次白書のようなイメージでよい。

桜井：敷田委員が言われたように、詳細なデータはデータベースにあり、年次報告書にはデータベースにたどり着けるよう書いておく。鳥澤委員が言われたように水産資源の資源評価票はあるので、ホームページからそこにアクセスできるようにしておく必要がある。

敷田：科学論文のように、ダイレクトに参照先が書いてある必要はないと思うが、必要あれば、「データベースに詳細なデータがある」という書き方をして欲しい。

中山：お話しがあった通り、従来のデータを捨てるということではなく、それはそれで取りまとめを行う。年次報告書は、一般の方にわかりやすく取りまとめるということである。宜しくお願ひしたい。

中川：印刷部数や配布方法はどうか。書き方がそれに依じて変わると思う。予算の関係もあると思う。全体で **20-30** ページということだが、付属の資料等、これまでの資料を掲載するとなるとページ数が増えると思う。それから、印刷して配布するだけでなく、インターネットでも閲覧できるようにすれば、見る人も増える。

敷田：印刷は予算にかかわるので私から答えられないが、本体だけで **20-30** ページ、付録は厚くなっても構わないと思う。本体だけを配布することも考えられる。配布先について、年次報告書をどのように活用するかがポイントだと思うが、当面は知床に関わりのある先を優先して配布するというので、これまでとあまり変わらないと思う。後ほどの議題にもある新聞のような媒体とセットにして、たとえば小中学校や高校に配布することも考えられる。資料提供するときに何ならかの機会、今回の発表はこれだけだが全体としての傾向はこうだということで付録のようにしてつけることも考えられる。

中山：あまり分厚くなると配布がしづらい。予算の関係もあるため、結果的に本文を中心に配布するということにならざるを得ないかなと考えている。付属資料は、インターネットでアクセスして閲覧してもらうのが現実的かと思う。

桜井：白書として出す際、一般の方がわかるようにするため、平易な書きぶりにしないとイケない。図や写真についても平易に、場合によって写真を入れないとイケない。カラーにするのかどうか。そのあたりの見極めがわからない。

敷田：何年後かには我々が手にする環境白書のようになれば良いと考えているが、いきなりそのような完成形に持っていくのは厳しいので、すこしずつ工夫して読みやすくしていきたい。来年からすぐにとということだと気が重いため、すこしずつということをお願いしたい。

中山：国会で承認を得る白書並みに分厚いものを作るのではたいへんなことになる。いままで作った印刷物は、それほど広範に配布しているわけではない。そのあたりは予算の絡みが大きいので、さきほど述べたように節約すべきは節約し、なるべく広い範囲に見てもらえるように工夫したい。

山中：敷田委員がよい形にまとめてくれた。感謝している。年次報告書は、科学委員会発足当初から、石城元委員長が提案されてきたものである。徐々に最初の発想の形に近づいてきた気がする。感謝申し上げる。

桜井：年次白書については、引き続き敷田委員に検討をお願いしたい。

議事 5. 知床国立公園管理計画改定について

■資料 5-1、5-2、5-3：国立公園の管理計画について

…三宅（環境省）より説明、以下抜粋。

- ✓知床国立公園の管理計画は、平成 5 年 3 月以降、見直しが行われていない状況。世界自然遺産に指定され、公園事業の執行状況、自然生態系や公園利用の状況等、平成 5 年以降大きく変化しているため、全体的な内容の見直しを行う。
- ✓平成 24 年度に国立公園管理計画の改定を実施予定。世界自然遺産登録後の各種計画や取組等と整合性を図る形での改定を行う。

【質疑】

中山：わかりづらい点を補足する。国立公園の計画の体系としては、まず知床国立公園計画、いわゆる公園計画がある。その中でゾーニングや利用施設の立地場所を決めている。さらにそこでいろいろな事業をおこしたりする場合は、許認可の対象となり、許認可も全国一律の基準が決められており、その基準に基づいて許可を出すという形になっているが、地方ごとにローカルな事情があるため、それを反映させるために公園計画よりもより具体的なレベルで管理計画を定めることになっている。たとえば、許可

のときには全国一律の基準に加えて屋根の色は〇〇色にすることとか、個別具体的に決めておくべきことをこの中に盛り込む。管理計画は、許認可や施設整備の方針を書いているもので、全国で策定している。本来は一律で決められているが、知床の場合はそうはいかないだろうということで、さまざまな検討経緯を踏まえて組み込んでいきたい。これまでの経緯を熟知している担当者がいる来年度に改定をやってしまおうということである。

桜井：このスケジュールは全ての国立公園で同じか。

中山：通常、公園計画を改定すると管理計画を改定するというスキームでやっている。知床の場合、これまで公園計画は大きく変更していないが、各方面で様々な議論が進んでいるため改定をしたい。

桜井：国立公園内で地熱発電や風力発電といった資源の利用が起きる可能性もあるが、そういうことも別の国立公園ではやっているのか。

中山：地熱風力はどうか分からないが、大きな事業、特なものとして地熱発電があれば管理計画で定めることもありうると思う。実際にあるかどうか、私は承知していない。理屈としてはある。

梶：基本的な質問だが、年毎に見直すというスケジュールか。

中山：本来、公園計画の改定は5年ごとだが、小規模な改定ですましてきたというのが現状である。管理計画も5年で見直すのが本来だが、実際にはできていなかった。また、エコツアーリズム戦略に基づく議論を今後進めていくと、利用のあり方やルールが変わることが想定され、当然だが管理計画や公園計画との関係が出てくる。従って、加除式ではないが、比較的簡単に修正できるようなかたちで整理するようにと指示してある。

中川：資料5-1に「先端部および中央部の利用適正化基本計画はエコツアーリズム戦略の策定を機会に廃止することとし」とあるが、この内容は初めて聞いた。これは性急だ。エコツアーリズム戦略は基本的な戦略なので、より詳細を定めている利用適正化基本計画を廃止してよいのか、国立公園の管理計画に全てを引き継げるのか、しっかりと検討するべきだ。利用の心得も廃止ということか。

中山：ご指摘の通り、すぐに廃止ではない。エコツアーリズム戦略に基づき新たな扱いが決

まればそれに従った扱いにするということだ。その以前の話として、利用適正化基本計画については管理計画の改定にあらかじめ入れておく。また、利用の心得は従来と扱いは変わらない。エコツーリズム戦略に基づいて個別の議論が進んでいけば変えていく。

三宅：3月に適正利用・エコツーリズム検討会議があるが、エコツーリズム戦略を定めたあと、既存の計画をどうしていくかという議論は、検討会議で議論する必要があると思う。こちらの案としてはエコツーリズム戦略が完成するので、既存の利用適正化基本計画は管理計画に反映させ、利用の心得については基本的には今後も継続する方向で考えているが、今後の方向性については適正利用・エコツーリズム検討会議でご議論して頂きたいと思っている。

敷田：適正利用・エコツーリズム検討会議においても、エコツーリズム戦略が完成したら、エコツーリズム戦略でカバーできる部分は改定・廃止していくことは合意している。書き方の問題であるが、おそらく半島先端部の状態は見直しが必要だと思っているので、新しい戦略のもとで議題提供することになると思う。廃止して、エコツーリズム戦略の中で新たに位置付けると理解頂きたい。自動的に明日から無くなるというわけではない。宜しく願いたい。

桜井：書きぶりを注意してもらいたい。これを読むと廃止ありきのように読めて誤解を与えやすい。

議事 6. 地域に向けた取組について

■資料 6-1：ニュースレターについて

…木村（環境省）より説明、以下抜粋。

- ✓平成 23 年度より科学委員会しんぶんを発行。地元広報を用いた全戸配布、宿泊施設やビジターセンターなどの主要な利用施設に配布。
- ✓科学委員会、各WG、河川工作物APについて、これまで全 6 号を発行。

【質疑】

中川：デザインについて、科学委員会やヒグマ管理方針検討会議、シカWGのニュースレターが似ていて、ナンバーも重複していたため、混乱があったようである。会議によって多少異なるデザインにしたほうがよい。

桜井：縦書きや横書きも混じっている。どの年齢層を対象にするのかも重要な点である。

木村：レイアウトについては統一したものにする方向で作成している。担当によって若干変わってしまっているが統一していきたい。一般の方にわかりやすく伝えるということで対象年齢は特に設定しないが、難しくない内容で作っていきたい。

松田：会議毎ではなく、全体の通し番号を入れたほうがわかりやすいのではないか。発行日は裏にあるが、表でもよい気がする。これである程度、中川委員の言ったことは解決すると思う。

中川：具体的には、科学委員会のNo.1 とヒグマ管理方針検討会議のNo.1 について、2 種類あるのがわからなくて配布の際に混乱があったと聞いている。サブタイトルになっている「科学委員会」「ヒグマ管理方針検討会議」を大きな文字にするなど、工夫したほうがよい。上半分が似ているので混乱したのだと思う。

中山：No.1 ばかりでわかりづらいという指摘はごもっともだ。体裁はご意見を踏まえて修正したい。

桜井：担当が違うということでスタイルが変わったということだ。おそらく担当間で相談されてフォーマットは決めてやったのだろう。新聞の上に通し番号を入れればよいと思う。

増田：最初の新聞は知床財団で作成した。そのフォーマットを知床財団が担当していない他の各WGの担当者に渡した。縦横は其中でずれたのだと思うが、今後は統一感を持たせたいと思う。細かい点は意見をいただければ反映したい。宜しく願いたい。

敷田：科学委員会新聞とは直接関係ないが、知床世界自然遺産の保全保護を含めた、地域外も含めた、外部への広報を考えると新聞も有効だが、短いビデオ媒体を用意する時代かと思う。提案したい。たとえば2-3分でエゾシカをどう管理しているかというビデオを作成すれば、そのビデオをホームページで見てから、知床に興味を持ってやって来ることも考えられる。新聞は見なくても、短いビデオを見せられれば、観光客が効果的に学習してから現地に入ってもらえる。事務局に対して、知床財団にもお金を出してもらって、ビデオ作成をしてもらいたい。出演者として科学委員会の先生や関係官庁の方もいる。キャストは十分いると思うので、ぜひとも検討願いたい。即決してもらえればありがたい。科学委員会も公開されているので、他の委員会も含めて、

Youtube や Ustream での公開も検討して頂きたい。

山中：当財団の経営状況は厳しい。普及啓発事業については、企業寄付を頂いて行っているものもある。たとえばアサヒビールさんからヒグマ普及啓発の事業について寄付をもらっている。新たな財源があれば科学委の普及啓発の貢献にまわしていきたいと思うが、すぐにビデオ公開を行う技術やお金はない。

敷田：技術やお金はなんとかなるはずである。即決してもらいたい。共感が得られれば、結果として寄付も増えると思う。

増田：科学委員会関連の会議は公開されているが、報道関連の取材がかなり少なくなっている。以前はテレビ局も含めて露出度が高かった。せつかく公開されているので、手段は別として上手にアピールして、世間の中で注目されるものにしていくように運営側も考えていきたい。そうした中でどういった手段がいいのか、ビデオなのか、新聞なのか、工夫をしていかないと注目度が下がっていくことになりかねない。年次報告書もうまく使っていくことが大事だと思う。

中山：本日の会議、マスコミは途中退席してしまった。ビデオはお金がかかるからできない。業務としてビデオを作ることがある。費用対効果が低いわけではないが、大変で、このような会議を単に録画しただけのものであれば職員でもできるかもしれないが、編集してコンパクトにまとめてとなると手間とお金がかかる。広報ツールとして、普及しつつあるので魅力的だが、今の状況でそういった予算がどこにあるかということ厳しい。どこの役所でも同じだが、最初に切られる予算はそうした予算である。

敷田：費用対効果は高いと思う。一般の方の共感を得ることが、第 2 期の知床世界遺産管理計画の目標のひとつだと思う。即決ができないということであれば、次回の科学委員会までに公開方法のこと、ビデオ作成のことを検討させて頂き、議題として提供させて頂くということではいかがか。もちろん事務局と相談してやる。

中山：再三申し上げるが、予算はとれない。そのようなものに予算がついているためがない、正々堂々やっても無理である。そのような予算が一番切られる。このご時世、環境省の予算自体も国立公園絡みがばっさり切られて、復興予算に持っていかれている。検討しても前向きな答えは出せないと思う。

敷田：予算が欲しいという検討をするわけでない。この方向で科学委員会として情報公開を進めたらいいということ、素案を作りたいということである。予算がつけば実施す

る。

松田：マスコミが少ないと言うが、いつもマスコミが注目する議題ばかり物議をかもしているわけではない。そうある必要はないと思う。たとえば、知床財団を訪問した際、ダイナビジョンを見せてもらった。いい映像がある。テレビ局が所有している動画もある。そうしたものを紹介するだけでもいいし、ダイナビジョンをごく短く編集してサイトに掲載すれば、ひょっとすると著作権の問題もなくできるのではないか。工夫はできると思うが、新たな予算も組めない、委員が編集に関わるというのでは大変になる。柔軟にやればよいと私は考える。

桜井：エアドゥに搭乗すると、いまだに知床の映像が流れている。あの映像も3-4年かわっておらず、同じ映像が流れている。スポンサーを頂いて、ああした映像を作り替えて提供してもらうことも検討に値する。

敷田：私が言っているのは20-30分の映像ではなく、20秒とか3分のようなプレゼンで使えるような内容だ。たとえば、観光事業者が自分のホームページにアップして、観光客に見てもらえる。映像に知床財団のクマ対策の場面が入ってきたり、先生がコメントを入れたりして観光客の理解が変わってくる。予算がないとか何とかということではない。ぜひ認めて頂きたい。

桜井：敷田委員からの動画を使った情報公開が提案されているが、事務局はすぐに答えを出せないで、敷田委員と事務局でやり取りをして頂き、次回の科学委員会までに結論出してもらうということによいか。

一同：同意

■資料 6-2：地元報告会（自然遺産しれとこ「科学教室」）の実施について

…木村（環境省）より説明、以下抜粋。

✓科学教室は羅臼町で1回、斜里町で2回、計3回実施し、のべ85名の参加者。

【質疑】

桜井：この事業は来年度も継続と考えてよいか。

中山：来年度も継続を検討しており、予算要求中である。

議事 7. 科学委員会等の今後の予定について

■資料 7：平成 24 年度科学委員会等の日程と主要議題（予定）

…木村（環境省）より説明、以下抜粋。

- ✓科学委員会、河川WG、エゾシカ・陸上生態系WG、河川工作物APの開催について、来年度は例年通り各 2 回開催を予定。

【質疑】

敷田：適正利用・エコツーリズム検討会議に関連して、来年度はエコツーリズム戦略の試行を行うため、1 回目の適正利用・エコツーリズム検討会議を 6-7 月ではなく、秋に実施するかもしれない。来年度だけは特別だと理解頂きたい。

桜井：そうすると、2 回目の適正利用・エコツーリズム検討会議は年度末になるということか。

敷田：2 回目の適正利用・エコツーリズム検討会議は、エコツーリズム戦略を決定する重要な会議となる。1 回目の開催状況を見てから実施時期を決めたい。

桜井：事務局もそれでよいか。

事務局：同意

中川：科学委員会や各WGの委員の他に幅広い専門家、研究者ネットワークを作るという話があり、アドバイザーネットワークができて、名簿ができたように記憶している。メーリングリストについて、いま現在は機能しているのか。

中山：メーリングリストはあるが、使われている実績はない。具体的なものは、各WGのメーリングリストで議論をお願いしている。そうしたかたちでそれぞれのWGのメーリングリストは使わせてもらっているが、アドバイザーネットワークについては実績がないのが現状だ。

中川：報道が少なくなったという話があったが、パブリックコメントも少なく、関心が低

下、おまかせになっている可能性がある。科学委員会の委員、行政だけでなく、幅広く意見を持って運営していかないとあまりよくない。せっかく作ったグループも含めて、パブリックコメントをもっとアピールしてもいいのかと思う。

中山：パブリックコメントを第2期知床半島エゾシカ保護管理計画について実施したが、意見を出してくれるように呼びかけることを考えたが、今回はそれをせずに通常ルートだけで広報を行った。昨今、九州電力のやらせメール問題があり、あえて直接的な呼びかけはやめさせてもらった。

松田：いい悪いは別にして、自由に書いてくれと呼びかけるのを科学委員がやるのは許されると思うので、事務局でなく、我々サイドから呼びかけるのがいいと思う。メーリングリストは忘れていたので、ヒグマのメーリングリストで呼びかけてもよいので、知床白書の原稿ができた段階で呼びかけをするのがよいかと思う。研究者ネットワークのメーリングリストが使われていけば、科学委員以外のメンバーからも投稿が出てきて機能していくと思う。

梶：科学委員会は札幌と現地で交互にやっていたかと思う。科学委員会は、扱う材料が多く、忙しいということはあるが、ポイントを決めて1年に1回くらいは野外に出て、実際に状況を見て共有すれば議論が深まると思う。時間的に厳しいと思うが、検討頂きたい。シカであれば、間引いたあとにどうなるか、海域や河川について全てを見るのは無理だが、そうした機会があると話がわかりやすいかと思う。

中山：科学委員会全体でということか、WGによっては行っている。意見は賜った。

宇野：シカWGの開催時期を変えるのは難しいかと思うが、個体数調整事業の方法検討が必ず2回目の会議、この資料では10月に入っているが、10月に方針を決めたあと準備するとなると、流氷が来る前に個体数調整をきちんとやるというのが時間的に間にあわない。方法検討を早めに、たとえば1回目の会議で検討するとか、スケジュールを再考して頂きたい。

中山：ご意見は検討させてもらいたい。

桜井：日程調整や内容について、もう一度検討する必要がある。宜しく願いたい。

議事 8. その他

■資料 8：日露隣接地域生態系保全協力プログラムの推進に係る今後の体制について
……桜井（海域 WG 座長）より説明、梶（シカWG座長）より別件について説明、以下抜粋。

- ✓日露隣接地域生態系保全協力プログラム推進委員会は、これまで外務省と環境省が 2 回行ってきた日露協力シンポジウムの一連の流れを汲んでいる。具体的には、検討事項③が中心となる。予算が大きくないため、シンポジウム、ワークショップをある話題に特化して開催することを検討していく。3 年に 1 回程度、何らかの国際会議等と抱き合わせて、総合的なシンポジウムの企画を検討する。推進委員会は、科学委員会や海域WGの前後で開催する。
- ✓日露隣接地域生態系保全に係る情報収集・専門家交流推進チームは、北方四島に行く調査研究プログラムを指す。今年は、8 月に専門家交流として国後島にコウモリ・リス類の調査、8 月中下旬に国後島に外来種・絶滅危惧種の調査として各 1-2 週間、人が入る予定である。また、10 月には専門家交流として北方四島から人を受け入れる予定である。
- ✓国際野生動物学会（Wildlife society）とほ乳類学会が 2015 年に日本において、共催で会議開催を検討中。知床や日露協力プログラムをアピールするのにこの機会がいい機会である。
- ✓日露生態系保全協力プログラムに係るシンポジウムの報告書を現在作成中である。報告書をもとに、過去 2 年間のシンポジウムの内容を「オホーツクの生態系と保全」ということで出版物申請をしている。科研費がつけば出版となる予定である。

中山：長時間のご議論を感謝する。今後ともよろしくお願ひしたい。